

がけない分野の人の口から聞かされることがある。本書もそういう類の本で、過去七年間の開拓的調査の一端を披露したものである。個人の旅行とは異なる正式の科学調査を、政治情勢の微妙な地域で行うむづかしさ、それを乗り越えようとするさまざまな努力は、まえがきやあとがきに僅かにうかがえるだけである。こういう本を作ったこと自体もその努力の一つの表れで、この本を足場にしてさらに調査活動の拡大が計られるのだろう。昔とちがって写真や印刷の精度が格段に向上しているし、植物学的予備知識も豊富になったので、たいそう見栄えのする本となっている。144頁までが撮影日付のついたカラー写真で、高山帯、亜高山帯、草原・耕地、砂漠とまとめられている。以後が解説で、生態や用途を含めてかなり詳細に記述されており、とくに薬用についてはくわしい。和名のない植物には学名の片仮名よみがすべてつけてあり、本書が植物研究者以外の一般読者も対象にしていることを物語っている。トンボ出版の住所は、〒543 大阪市天王寺区空堀町 8-16 (Tel. 06-768-2461) (金井弘夫)

□角野康郎・遊磨正秀：エコロジーガイド・ウェットランドの自然 198 pp. 1995. 保育社。¥2,300.

自然環境保全の立場から、最近とくに水環境の重要さや湿原生態系の微妙なバランスが話題にのぼる。本書は動・植物生態学の研究者がその解説をめざしたものであるが、尾瀬や釧路のような特別な湿地だけでなく、水たまり、田圃の畦道やため池、川そのもの、さらに海岸のタイドプールまで、水とつながりの大きい環境についての理解を、一般の人々に深めてもらうことを目標にしている。全巻のおよそ半分の頁を、さまざまな水景観とそこに生活する生物の写真に割り、図鑑としてではなく、観察や理解の資料となるような文章で満たしている。見開き2頁が写真、次の2頁が読み切り解説となっているが、そういう工夫のわりには読みづらい。トピックにかかわらず字数が一定に制限されているためだろうか？知らない間に進んできた、海岸の護岸工事による環境多様性の喪失や、最近もてはやされている河川の「多自然型川づくり」への警鐘は、あらためて考えさせられる

ものがある。筆者の近所でもその例がみられるが、「自然型」という公園を造成したようなもので、予算が余ったので名目のよい仕事に使ってしまったような印象である。観察会や授業の参考に広くおすすめる。(金井弘夫)

□Kimura Y. and Leonov V. P. (ed.): C. P. Thunberg's Drawings of Japanese Plants 594 pp. 丸善。¥66,950.

1988年ロシア科学アカデミー図書館(サンクト・ペテルブルグ)は、争乱に伴う火災により150万冊の蔵書を失った。その復興のための国際事業が進む中で、日本植物の図二束がみつかり、このことは事業に協力していた丸善に伝えられた。丸善は1990年木村陽二郎氏らを送り、これを調査したところ、この図はツェンベリーとシーボルト旧蔵の、未公表の資料であることが判明した。丸善は創業125周年記念事業の一環としてこれらを刊行することとし、まず1994年“Siebold's Florilegium of Japanese Plants”を出版した。本書はそれに続くツェンベリー旧蔵の図と、それに係わる論説を含んでいる。

まず16頁にわたって、これらの資料に伴っていたマキシモウィッチのノートが示されており、彼の東亜植物研究にこの図が大いに活用されたことを示している。このノートを活字に組み直したものは、N. Zabinkovaによって第二部に示されている。これに続いて305枚の植物図が原寸で記録されている。ちなみに本書のサイズはB4である。ここまでが第一部をなす。第二部は論説で、木村陽二郎は本資料刊行のいきさつと、ツェンベリーの日本植物研究の業績を回顧する。W. T. Stearnは欧州の視点からそれを述べるとともに、日本の表記としてJaponicaとIaponicaが用いられているが、ツェンベリーは自分の文章にはIaponicaと記したことはなく、Jがラテン語では後発の文字であるため、とくにドイツの植字工は頭文字にJを使わずIを用いた結果であり、語法的にも誤りであるとしている。V. I. Grubov, M. E. Kirpicznikovは、マキシモウィッチが本資料をいかに研究に利用したかを述べる。T. A. Tchernajaは図のそれぞれについて描かれたいきさつを考察

し、これらがロシアに入った経過とマキシモウィッチとの関係を記している。B. Nordenstam は、ウプサラのツェンペリーハーバリウムの標本の写真を示しつつ本書の図と比較して、ほとんどが対比できるとしている。大場秀章は図の植物名の同定と学名の出典を整理して分類順に示し、今後の研究に有用な情報を提供している。彼はまた、ツェンペリーが日本に好感を抱いたのは、当時のわが国社会のバックグラウンドであった儒教的教養の反映によると考察している。本書の Appendix は、B. Nordenstam による *Icones Plantarum Japonicarum* の再検討で、出版の経過を当時の往復書簡によって詳細にたどり、従来の date に再考すべき点があることをのべ、あわせて *Icones* と標本をくわしく比較して、どの標本のどの部分から図が描かれたかを検討している。その結果、異なる種類の部分が一つの図に合成された 'iconohybrid' がみつまっている。最後に詳細な（とくに人名の）subject index, 植物名と図の索引がある。

本書の資料の発見とそのすばやい刊行は、日本や東亜の植物分類学に大きな貢献をするもので、関係者の努力に賛辞を呈したい。ふりかえて、わが国でこのような資料が、長年にわたって無事に保存されるだろうかと考えると、有力な自然誌研究機関でさえ、「利用頻度の低い図書は廃棄してしまえ」と言う館長が実在するような国では、首を横に振らざるを得ない。自然誌研究機関は「研究」ばかりでなく、今は役に立とうが立つまいが、「保存」ということにも同じ比重をかける必要があるということを、公知のものとする必要がある。（金井弘夫）

□千葉県立中央博物館（編）：リンネと博物学－自然誌科学の源流－ 220 pp. 1994. 初刷. 1996 改訂 2 刷. 千葉県立中央博物館友会の会発行（電話 043(265)3111 内線308）.

千葉市中央区青葉町955-2にある千葉県立中央博物館は1994年10月1日より12月4日まで特別展「リンネと博物学」を開催した。本書はこの際にこの展覧会のために編集し、観覧者の参考に資したものである。会期後、実費で売られている。それはリンネを知り、リンネの著作を知るために貴

重な資料として安価に手に入るため、展覧会後も需要が多く、1996年2月16日にも改訂2刷が出版されたのである。

スウェーデンのオラフ・レンスコーク氏はリンネの肖像画を集めることが始まりとなってリンネに関する手に入るすべてを集め、彼のいわゆるリンネコレクションは5000点に及んだ。すなわちリンネ前後の植物分類学書をはじめ弟子たちの論文、リンネの伝記を集めたが、リンネの著作はもちろんその中心をなす。また彼の肖像画やメダルをたんねんに集めている。

この記念すべきリンネ・コレクションをスウェーデン学問発達に要する金のため売却することを決断したレンスコーク氏とこの高価な価値ある資料を購入した千葉県立博物館、さらに千葉県民に対して尊厳の念を表明せざるを得ない。最近各地の美術館が、一枚の適切高価な西欧名画を購入することをきくが、これと同様の値段で近代生物学の父ともよばれるリンネの立派な資料が購入されたわが国に初めて置かれたことを喜ぶたい。

館長沼田 眞氏のあいさつ、レンスコーク氏の「リンネ資料を蒐集して」について色彩刷の植物図が9-23ページにわたって引用され、24ページはリンネ関係の現地写真、25-80ページはリンネの書物の中の図（その多くは彼の「クリファード庭園誌の中の植物図」の後、記事があり、列記すると、P.81, 最高のナチュラリスト、リンネ（木村陽二郎）。p.91, 分類学の黎明期における生物分類と種概念（直海俊一郎）。p.105, リンネと医学（梶田 昭）。p.111, リンネと生態学（沼田 眞）。p.117, リンネと昆虫学（小西正泰）p.125, リネーとロシアの博物学者（小原毅）。p.131, 植物分類学の始祖としてのリンネと種名のタイプ（大場秀章）。p.137, 動物と植物の学名について。p.143, リネアン・ソサエティ：その歴史と現状（大場秀章）。p.149, ロンドンのリネアン・ソサエティ訪問記（林 浩二）。p.153, リンネと鳥類学（桑原和之・茂田良光）。P.155, 自然の体系（初版）（訳：遠藤泰彦・高橋直樹・駒井智幸）。p.161, 展示品解説。p.211, リンネ関係のメダル（大場達之）。p.218, リンネ関係年表。

記事の中に多くの図版があり、リンネの肖像リ